

名古屋大学博物館の活動に期待するもの（副総長 伊藤正之）	1
ローレツとマボヤーウィーン自然史博物館での標本調査によせてー （博物館教授 西川輝昭）	2
第2回特別展ースタートした名大紹介ー（博物館助教授 蛭薙観順）	6

ローレツとマボヤ ーウィーン自然史博物館での標本調査によせてー

博物館教授 西川輝昭

内陸オーストリアはウィーン育ちのローレツ（Albrecht von Roretz）と、日本周辺にしか生息しない海の動物であるマボヤの思いがけないつながりをご紹介します。10月3日まで開催中の当館第2回特別展「名古屋大学の医のこころ：医学部所蔵の教育資料・標本展」では、名大医学部の前史としてローレツの事蹟にふれているので、小文が御来館のお誘いにもなれば幸いです。

名大医学部の礎

ローレツは、名古屋大学医学部の今日につながる基礎を築いたウィーン大学（図1）出身の医学者である。今から120年ほど前、招かれて名古屋に1876（明治9）年から4年間滞在し、堀川東岸沿いの天王崎（現在の中区納屋橋あたり）に新築完成した愛知県公立学校の教頭として、高水準のカリキュラムを整備した。この学校はその後、愛知医学校、愛知県立医学専門学校、愛知医科大学などと名前をかえ、現在の名古屋大学医学部に至る。

ローレツは名古屋を離れた後、金沢医学校と山形済生館医学寮で教えてから帰国したが、2年後に37歳の若さで新婚の妻を残して急死した。彼の生涯と活動は、田中英夫著『御雇外国人ローレツと医学教育』（名古屋大学出版会、1995年刊）に詳しくまとめられており、小文もそれに多くを負っている。



図1 ローレツが学んだウィーン大学医学部の校舎のひとつ、ヨゼフエーム（当時は軍医学校）。現在、向かって右手奥の部分が医学史博物館として公開されている。

日本の動物を採集

ローレツは博物学にも造詣が深く、江戸時代初期に来日したケンペルに始まりシーボルトで代表される欧州学者の業績（それも日本人による本草学的蓄積があったからこそだが）に刺激され、日本での博物学的調査を切望していた。叔父が清国や日本などにまたがる弁理公使として赴任するのを機に、故国での医師の職をなげうち、オーストリア・ハンガリー公使館付医官の肩書（無給）で来日した。1874（明治7）年11月末、28歳になろうとする若者であった。

彼はさっそく翌年春から約4ヵ月をかけて西日本を踏査し、多量の標本を採集した。戻って横浜で医院を開業して名声を得、名古屋に招かれた後のことはすでに述べた。日本滞在中、彼が各地で折りにふれて採集した動物標本（ローレツコレクション）は、順次ウィーンの王室博物館に収められ、それをもとに専門の分類学者が新種を多数つくった。

これら標本群はウィーン自然史博物館（Naturhistorisches Museum Wien；図2）に引き継がれている。筆者はその調査を名古屋大学学術研究基金の援助で今春行うことができたが、



図2 春の朝日を浴びたウィーン自然史博物館の全景。

その成果の一端がマボヤの話である。なお、ローレツコレクションは350種以上を含む1450点あまりの標本からなっており、なかには、ローレツの死後に妻オルガが寄贈した標本もある（本コレクションの全容については、近刊の『名古屋大学博物館報告』第17号に発表予定）。

マボヤに3種、その学名が問題

ホヤは、われわれ脊椎動物の祖先ともいわれ、海に住んで、脊椎骨（背骨）のもとになる脊索を持つがそこから先に進まないまま大人になる。脊索は子供の時代に尾部にだけあり、これで短時間泳いだあと岩などに付着して大人に変態する時には、吸収されて無くなってしまふ。

ホヤは全世界で約2500種、日本近海に限っても約300種が知られているが、その一つがマボヤで、大人の握り拳ほどの大きさに成長する。日本で古来から単に「ホヤ」（漢字では、保夜、老海鼠、石勒卒、海鞘など）と呼ばれ、平安時代から貴族や武家の食膳を賑わしてきた。現在、東北地方では食用として養殖されている。いぼをもつ外形から「海のバイナッブル」との俗称があるが、和名をマボヤという。

マボヤが近代動物分類学に正式にデビューしたのは1884年のことで、ローレツが日本で採集した1個体に対して、彼の友人ドラシェが *Cynthia roretzii* という新種として発表した。現在は、*Halocynthia roretzi* という学名（正式名称）に変わっている。

近年の研究により、「マボヤ」が実は3種を含むことが判った。これらはわずかだが繁殖期がずれているので、互いに交配しない。外形も微妙に異なる。青森県の陸奥湾周辺から北海道の一部にかけて3種が共存するが、西日本には1種しか生息しない。

3種の学名をきちんと定めるためにはまず第一に、命名の基礎になった上記の1個体

(ホロタイプと呼ぶ)が3種のどれにあたるかを知らねばならない。死んだ標本から繁殖の詳細は確かめられないが、形態ではどうか。この個体の外形図がドラシェの論文に掲載されており、それは西日本に生息するものと似ているが、いまひとつはっきりしない。産地の詳しい情報が欲しいところだが、その論文には「採集地：日本」とあるだけで、いつ採集されたかも記されていない。ローレッツがドイツの雑誌に発表した西日本旅行の紀行文にも、ホヤのことは全く触れられていないのである。ローレッツは都合7年半を日本で暮らし、山形に1880年から2年間滞在した他、1879年には暑中休暇で北海道を旅行しているから、他の2種のどちらかである可能性もある。

125年前の標本と対面

保存用のアルコールを注ぎ足されながら125年間大切に保管されてきたホロタイプ(図3)は、その外部形態の特徴から見ると確かに西日本に生息する型であった。標本ビンのラベルに産地の詳細は書いてなかったが、「1876」と年号が明記されていた。これは採集年ではなく博物館に登録された年を示すが、ローレッツが北海道や山形(上記参照)に行くより前に西日本で(たぶん来日早々の踏査中に)

採集したものであることが、これで判明した。現地に向いてこそ得られた成果であった。

実物標本は「生き」つづけ、新しい問いにも答えてくれる。博物館に働く人間として、そうした標本を将来にわたって「生かし」続ける責任の重さを改めて痛感した。

末筆ながら、ローレッツについて種々ご教示いただいた田中英夫(元名古屋大学史資料室員)と加藤鉦治(現、同資料室長)、そして、現地調査に便宜をはかってくださった Helmut Sattmann(ウィーン自然史博物館)と Elrich Rabl(ホルン市公文書館長)の諸先生に深謝する。



図3 マボヤ *Halocynthia roretzi* のホロタイプ(アルコール漬標本)。左が外側(被囊)、右がそこから取り出した中身(筋臓体)。